

すがわらでんじゅてならいかのみ

菅原伝授手習鑑

〔解説〕

延享三年（一七四六）八月、大坂竹本座初演。竹田出雲・三好松洛・並木千柳らによる合作。全五段。近松門左衛門の「天神記」を基本とし、当時のニュースである三つ子の誕生などを取り入れ書き下ろした物。二段目に菅丞相と菟屋姫の別れ、三段目に白太夫と桜丸の別れ、四段目に松王丸と小太郎の別れ、と、それぞれの段の切に親子の別れを描いており、「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」と共に、時代物の三大名作として親しまれています。

〔あらすじ〕

〔初段〕延喜帝の御代、左大臣藤原時平、右大臣菅原道真（菅丞相）が政治の中心となっていたが、反逆心のある時平は、菅丞相を邪魔に思っていました。

帝は病のため、渤海国からの使者に対し、弟君の齋世親王が名代となります。

菅丞相の佐太村（現在の大阪府守口市内）の領地は、白太夫（四郎九郎）という百姓が預かっており、白太夫には、梅王丸・松王丸・桜丸という三つ子がいましたが、それぞれ梅王丸は菅丞相、松王丸は藤原時平、桜丸は齋世親王の舎人（皇族など）につかえる下級役人）となっていました。

齋世親王は、天皇の病氣平癒祈願の参拝の折、桜丸と女房八重の手引きで、菟屋姫（菅丞相の養女）と密会します。時平の家来が詮議に来たため、親王と姫は、行方をくらまし、その後を桜丸が追います。

一方、名筆の誉れ高い菅丞相は、以前、不義の科で勘当していた武部源藏を呼びだして、菅家の筆法を伝授します。時平は、斎世親王と苺屋姫の行方が知れないのは、菅丞相が親王を帝位につけ、娘を后にして、自分が実権を握ろうとしている策略であると、讒言(他人を陥れるため有りもしないことを上の人間に言うこと)します。そのため、丞相は閉門、流罪となり、危険を感じた舍人梅丸は、丞相の実子菅秀才を源藏夫婦に預けます。

【二段目】桜丸は斎世親王と苺屋姫に追いつき、姫の実家の土師の里へ向かう途中で、菅丞相が流罪になった事を知り、一目会おうと行列の後を追います。安井の岸で汐待ちをしている一行に桜丸が追いつき、対面を願いますが、菅丞相の罪が重くなるとして許されません。苺屋姫は、姉、立田の前に伴われて実母覚寿のいる道明寺へ向いますが、役人判官代輝国の計らいで丞相一行も土師へと向かうこととなります。また、斎世親王と桜丸は都へと別れていきます。

土師の里では、覚寿が、丞相が罪に問われたのは苺屋姫のせいだとして、姫を杖で折檻します。それを菅丞相の声に止められるが、不審に思った覚寿が襖を開けると、そこには伯母への形見として丞相自らが彫った木像があるばかりでした。

立田の前の夫、宿弥太郎とその父土師兵衛は、時平に頼まれ、偽の迎えになり丞相を連れ出そうと計画しており、それを知った立田の前を殺してしまいます。偽の迎えが来て丞相を連れて行ったあと、覚寿は立田の前が殺されたことを知って宿弥太郎を刺します。そこへ、輝国ら本当の迎えが来ますが、実は、偽の迎えに連れて行かれたのは丞相の木像で、人々は奇跡に驚きます。そして、全ての悪事が露呈し土師兵衛も殺されます。丞相は覚寿や苺屋姫と別れて、名残を惜しみつつ太宰府へと旅立つのでした。

【三段目】梅王丸と桜丸は吉田神社で出会い、通りかかった時平を襲おうとして、舎人である松王丸と争いますが、父の賀の祝を済ませてからと、その場は別れます。

祝の日、三兄弟の嫁達、春・千代・八重が集まり仕度をします。四郎九郎は七十の祝に白太夫と名を改めます。

【喧嘩の段】白太夫が八重を連れて氏神参りに行っている間に、梅王丸と松王丸がやってきて喧嘩を始め、白太夫が大切にしている菅丞相の御愛樹、梅、松、桜のうち、桜の枝を折ってしまいます。

帰ってきた白太夫はそれを見ながら何も言いません。松王丸、梅王丸夫婦が帰った後、納戸に忍んでいた桜丸が現れ、丞相流罪の責任をとって切腹します。八重も後を追おうとしますが、物陰に潜んでいた梅王丸夫婦に止められます。白太夫は八重を梅王丸夫婦に託して筑紫へと向かうのでした。

【四段目】太宰府の菅丞相は時平の反逆を知り激怒し、雷神となって都へ飛ぶ。丞相の御台所は北嵯峨に隠れ住み、春と八重が仕えている。春の留守中に時平の家来が襲来し、八重は討ち死に、御台所は山伏に連れ去られる。

一方、武部源蔵夫婦は、京のはずれで寺子屋をいとなみ、若君菅秀才を我が子として匿っていましたが、これを時平に知られてしまい、首を討てと命じられます。源蔵は思いあまって、その日寺入りしたばかりの子供、小太郎の首を切ってしまいます。見分役である松王丸は、その首を秀才の首と認めて帰って行きます。そこへ、子供之母親がもどってきて、実は、小太郎は松王丸夫婦の子供で、身替わりを覚悟で連れてきたといっています。松王丸も現れ、心ならずも時平に従ってきたが、これでやっと菅丞相の恩に報いる事が出来たと語るのです。北嵯峨で御台所を救い出したのも、実は松王丸で、若君と親子の対面をさせ、小太郎の野辺の送りをを行うのでした。

喧嘩の段

さして出でて行く。

「コレ千代さん、年寄らしやつても物覚えがよいこと。こなさんやこの春は氏神様知つてゐる。八重さんは今が初め」

「言はしやんすりやその通り。物覚えのよい親御に違ひ、物忘れする子供達。松王殿何故遅いぞ」

「こちの夫も何故見えぬ」

「但しは来ぬ気か」

「今日見えいでよいものかいな。それこそそこへ松王殿」

「エ、これ、女房を立ちそこに立たして、刻限過ぎたを知らずかいのう」

「ヤアベリ／＼とかしま姦しい。時平様の御用あつてそれ

終はねば動かれぬ。先へ参つてその訳言へと言ひ付けたを忘れたか。梅王、桜丸もまだ来ぬさうな。親父殿も内にござらぬ」

「サア、その親父様は八重様を同道で、もちつと先に氏神参り、兄弟衆はまだ見えぬ」

「ソレ見いな。遅いといふ俺は主持ち。梅王も桜丸も、主なしの扶持放され。用もない和郎達が遅いのがほんの遅いの。お春殿、そぢやないか」

と、詞の端にも残る意趣。梅王も日足は長ける急いで来かゝり突つかゝり、松王には顔振り背け、

「お千代殿、今日は大儀。コリヤ女房共、親人と桜丸、八重もこゝには何故ゐやらぬ」

「イヤ、今も松王様のお尋ね、桜丸様はまだ見えぬ。お二人は宮参り」

「ム、桜丸はどうして来ぬな。ア、待ち兼ねる者

は来いで、胸の悪い見とむない面構へ」

と、梅王に当てこすられ、松王が一徹短慮、

「あたぶの悪いねすり事、言ひ分あらば直きに言やれ」

「ム、なんのわれに遠慮せう。わが面構へを見る度々、
ゲイ／＼と、虫づが出るわい」

「ム、プハ／＼、ハレ申したり腹の皮。この松王
は生れついて涙もろい。桜丸やそちが様に、扶持放さ
れの瘦せおとがひ。ひだるからうと思ふてやるが、兄
弟の誼よしみだけ」

「ナニ、扶持放され。扶持放されと笑ふ奴が喰ふ扶持
が碌な扶持かい。鉄丸を食すといへども心汚れたる人
の物を受けずとは、八幡大菩薩の御託宣。心汚れた時
平が扶持、ありがたう思ふはな、人でなしの、猫畜生」

「ヤア畜生とは、舌長な梅王。今一言言ふて見い」

「ホ、望みなら易い事。畜生、畜生々々、どう畜生」

「もう赦されぬ」

と松王丸、刀の柄に手を掛くれば、梅王も反り打ち返
し、詰め寄り詰め寄る二人の女房、

「これはマアおとましい気が違ふたか松王殿」
と、千代が夫を抱き留むれば、

「七十の賀を祝ひに来て、親父様に逢ひもせず、反り
打つてどうさしやる。祝ひ日に抜いてよいか、こちらの
人梅王殿」

と、刀の柄にしがみつく、女房春を取つて突退け、

「七十の賀でも祝ひ日でも、堪え袋の破れかぶれ、留
め立てして怪我するな。コリヤ松王、遅れたな。女房
が留めるを幸ひに、頬げたに似ぬ腕なしめ」

「オ、留めらるゝを幸ひとは、わが心に引き比べて
松王には慮外の雑言。身が女房が留めたより、そちが
女房が親にもまだとの一言。肝先へきつと当り、堪え

く、堪えたがもうたまらぬ。真劍の勝負は親人に逢ふての後、それまでの腹癒せに、砂かぶらさねば堪忍ならぬ。千代にこれを預ける」

と、両腰抜いて放り出し、裾引からげ身拵え。

「才、畜生めがコリヤよい了簡。桜丸が来るまでは松王が命松王に預ける」

と、同じく両腰放り捨て、

「刃物を渡せば血はあやさぬ。女房ども邪魔するな」

とつゝと寄つて縁より下へ踏み落とせば、早速の松王落ち様に諸足かけば梅王丸、真逆様に落ち重なり、掴み合ひ叩き合ひ、組んでは離れ、離れてはまた組合ひ、捻ぢ付け引伏せ蹴つ踏んづ、双方力も同い年、血気盛りの根比べ、千代と春とは二人の両腰、取られもせふかと氣遣ひ半分、傍へも寄られず、『ハアくくく』

と、心をあせり氣を揉み上げ、

「どちらが勝ちも負けもせず、叩き合ふたが二人の存分。梅王殿もふよいわいな」

「松王殿もう置かしやんせ。やめてく」

と言ふをも聞かず、

「勝負つかでは無駄働き。投げてくれん」

と松王丸、嵩にかゝつて押す力、怯まぬ梅王突掛くる、肩先捻つてがっくりさせ、横に抱へる松の木腕、劣らぬ肘骨梅の木腕、絡みもぢつて押し合ふ力、双方一度にこけかゝり、凭るゝ拍子もたに桜の立木、土際四五寸残る木の上はぼつきりぐわつさりと、折れたに驚く相嫁同士、二人が勝負も破れ相撲、共に呆れて手を打ち払ひ、うろつく中へ早や下向、

「アレ、親父様のお帰りぢや、白太夫様の」

と言ふ声に、二人は肩入れ裾下ろし、腰刀差す間も

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。